

# Solfège

〔その一〕

大 橋 博

## Solfège とその目標

Solfège（音階発音、音階練習）を吾々は二通りの解釈をしている。

一つは、其の名の通り音階を唱う事、即ち楽譜を音名或いは階名で唱う事である。

二つは、上記を含む一切の音感訓練である。

尚上述の後者の場合は、これを更に二つに分けて訓練される。

1. 聴音書取。

簡単な曲を聞いて楽譜に再現する事。

2. ソルフェージュ。

簡単な曲を音名或いは階名で唱う事。

以上の二つである。この二つの訓練により簡単な楽曲の基礎的な事柄がその譜を一読しただけで理解出来るまでに育成される事が、Solfège の目標と云う事になる。

次にその1の「聴音書取」の記符法について述べる事にする。

〔聴音書取〕

### I 諸表に音符の位置を記入する事

先づピアノにより、或る単旋律から弾かれたとする。

A. 絶体音感の持ち主は、難なく其れ等の音の位置を五線に記入する事は出来るであろう。

B. 相対音感の持ち主は、

先づ其の曲が何調であるかを知る事の困難に当面するのだが、通常行われている旋律聴音の方法によって説明する事になると、

1. 調性が示され、主和音が与えられる。

此の場合は主和音から其の調性の音階を心の中で唱うなりして音階の構成音を確認しておく、それによって採符する。

## 2. 旋律の最初の音名と音高が示され与えられる。

此の場合是一回通奏される事によってその調性感をつけ、最初の音が移動ドによる音階の何度音に当るかを知って後採符する。

## 3. 一点 a, 或いは一点 c が与えられる。

此の場合其の音を基にして C dur の音階を先づ考え、何音になるか、(幹音より旋律が始まる場合は比較的解りやすいが、派生音より始まる場合は、此の練習を特にする必要がある)そしてそれが通奏により認められた調性の何度音になるかを知って後採符する。

以上の三種類の方法から夫々調性が解りそこで採符となるわけだが、単一調性の場合でも間違っ採る人が未だ未だ多くいるので、これ等の事について例を上げて説明する事にする。

## ○ 何故間違っ採るか。

先ず楽譜を読む事に慣れていない事が第一。

次に Piano や Violin はある程度弾けていても唱う訓練をしていない事。

又、歌は唱えても音符を声に出して読みながら唱う事をあまりしていない事。

以上の事柄に多くの原因がある。此の事から——新曲視唱の訓練と聴音書取はその感覚に於ては等しいものである事を認識す可きである。

## ○ どのような間違いをするのか。

## 1. octave の飛躍の場合。

例えば、



を



とか



のように採る事の間違い。

これはCの音の飛躍を旋律的に低い音のCを掴む事以前に、C dur の和音感を感じ、手近かな音を無意識のうちに採って了ったわけだが、octave 以上の飛躍は、我々の歌唱の中には縁遠いものであるため音程感が曖昧になって了う。

例えば、



を



とか



と探る。

これはg音を聞いて G dur の和音感から d をソと聞いていい、C dur のソを書いて了っている。

他に、



を



を



を



と云う間違いがあるが、其の間違う音は其の前の音による和音感の影響は先に述べたが、其の音が比較的短かく、次に来る音が旋律の流れの上から何かの特徴を持った場合に起る事が多い。

2. 特徴音がなくても他の調性と感じた場合。

例えば、



の場合、二小節目をドソランドと聞いて了い



のように書いて了う。

又、



の場合、二小節目をソミファレドと聞いて下さい



のように書いて了う。

前者の場合は二小節目で F dur への転調を、後者の場合は二小節目で G dur への転調を感じて、夫々の移度下としての階名を原調通りの書き方で記入して了った事による間違いである。

### 3. 短音階の場合。

此の場合の間違いは、短音階に慣れていない事から、長音階としての階名へ移って了う事が多い。

例えば、



を



と採符して了うのなどは、上行の変質した gis の音と次に来る a との半音程を、シドと聞いて、その並行調に誤り記入しているわけである。

上例と同じ理由から



を



一九七

と採符する場合もあるのだが、



を聞いて



と採る場合は、二小節目で六度音七度音が夫々半音上行変質して A dur の音階らしくなって

いるので、ソラシドソレドと聞いて了う事は大変多い。

#### 4. 特徴音による転調の場合。

最も多く出て来る属調，下屬調への転調の場合を述べておく。

属調への転調は

其の特徴音が半音上昇して作られるので，それが進んで新調の主音へ行く場合，シドと聞き，原調のシドとして記入する事がある。然し原調の主音は原調の属音であるがために，強く記憶されているので，あまり間違いは起らないが，特徴音から飛躍上行したり，連続度下行，飛躍下行した時には，相当の困難が生ずる。

下屬調への転調は

例えば，



を



と採って了う。

これは3小節目からの一連の音符をファミレドシと聞いて了う所に原因がある。

短調の時，原調への転調の時に出て来た上行の半音程をシドと聞くのと同じように，下行の半音程をファミと聞いて了うのである。此の譜例の場合は，2小節目CからBへの飛躍を考える余地もない程に3小節目のファミレドの音感が強烈に耳を捕えているわけである。

以上は移動ド音感の人達が聴音書取を行う場合に陥る極く初歩的な誤りを述べたのであるが，これ等の誤りを注意深く直すように努力する事によりそれ以上の困難な音程も解るようになる。但し調性外音（臨時音）の訓練は，先づ隣り合った音，それから順次に離して，又旋律は初めのうちは自然な音の流れを主にした課題に依り，次第に難しくするように心掛けなければならない。

○ 間違いはないで採るにはどうすればよいか。

#### 1. 単一調内において飛躍した音を採る場合。

先づ其の新しい音を強く憶える事。（次に来る旋律をなるべく聞かないようにして）そして前にあった音から音階を埋めて探し当ててすぐその音を記入しておき，その音からの流れを求めればよい。

#### 2. 短調の場合。

此の場合はⅦ度音とⅧ度音に問題があるわけだが、上述1の場合と次の3の場合の方法で採る事以外に、短調独特の流れを唱う事によって練習し摘む事。(ファとソの音を長音階的、和声的、旋律的の三通りで夫々他の音から発音訓練する事。)


### 3. 特徴音が出た場合。

前述1の場合の方法とも一つの方法は其の特徴音の次に来る音(旋律的短音階は別として、特徴音が二つ以上続けて現われる事は初步の段階では殆んど出て来ない。)を覚えて其の音が原調の何音になるか1の方法で探し求め、その音から逆に特徴音を求めればよい。

以上三通りの方法は書取をする場合の事柄であるが、常日頃から階名で唱う事。新曲により多く接するようにつとめる事が必要である。

## II 音符の形をつけ、休符を記入する事

Iにより五線上に音の位置が記入されたとしても、それは未だ楽譜ではない。音符の形、

( 等) 休符、定められた拍子による小節線等が記入されて、

漸く楽譜になるわけである。

以上の事柄を記入する順番に従って述べる事にする。

### 1. 先づ定められた拍子の拍をはっきりと掴む事。

A 単拍子(二進拍子)の場合は四拍子、三拍子、二拍子であるが、其の拍の単位は最も多く使われている四分音符を基にして考える事にする。

B 複拍子(三進拍子)の場合は六拍子、九拍子等であるが、其の拍の単位は最も多く使われている附点四分音符を基にして考える事にする。

以上A、Bに於ける拍の長さが掴めた場合、それが何拍子であるか、又小節線の事等は考えないで、先づ其の一拍一拍をしっかりと掴む事。此のためには足先で床を打って拍子を採る方法が最も良い。但し集団で練習する場合は他人に迷惑をかけないように注意しなければならない。

一九五

### 2. 記入の仕方。

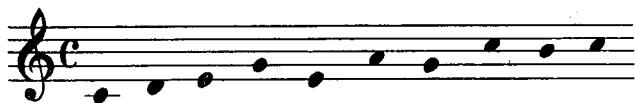
拍の頭にある音符、休符は必ず記入しておく事。

例えば、



の旋律が弾かれたとして

#### ① 点によって音の位置を記入する。



② 足踏みをしながら音の長さを確かめて、

四分音符は点のままにしておき、四分休符は下のように へ 印をつける。(四分休符は初めから へ 印にしてとってもよい)



③ 仕上げをする。



此の③番目に於て注意する事は、それまでは単に拍だけを考えていたのだが、此処では何拍子かを考え、記憶をたどり唱いながら符尾、休符を形づけて行くと同時に小節線を入れる事である。(譜例の下の数字は仕上げの順番を示す。)


以上の三段階の方法によって採譜は完了するわけである。


殊更にこの三段階に分けなくとも初めから四分音符、四分休符、小節線等を記入すればそれで良い。なる程上例のような簡単な譜の場合ならそれも出来よう。然し楽譜は色々と複雑なものがある。それ等のもの総てを正確に、速く採符する仕方として上述の三段階の方法を説明したわけである。

次に通常多く使われる音符、音群、休符等の記入法を述べる事にする。

単拍子(四分音符を一拍とするもの)について。

四分音符、四分休符については先の例で解ったと思うから次は二拍、三拍以上延ばす音符について述べよう。

先づ音符の形と時間の問題だが、例えば「二分音符等は何拍延ばすのか」と問えば、「二拍です」と答えて呉れる。将に其の通りである。ところが拍を1, 2, 3, 4と与えて或る音を二拍延ばして唱はせた場合、実際には  位いしか唱って呉れない。附点二分音符

の場合は  位で切つて了う人が大変多い。

例えば、



を無意識に



のように唱っているわけである。

そこで、次のような事をさせてみる。先づ二小節目を



と書い

て、ラの音まで唱わせ、次にラの口の形だけをさせて、ラの音を無音にさせて、ソの長さが四拍目に入る瞬間に切れる事を確認させる。二分音符に於ても同様の方法で長さを正しく唱うように訓練する事が先づ大切である。尚唱う場合、phrase の終りの長い音符が *diminuendo* になる事。これは音楽の演奏では一応常識の事ではあるが、solfège に於ては *diminuendo* は音の長さを曖昧にするため絶対に避ける可きである。

さて音符、休符等の記入についてだが、前例の②に依て行えばよい。即ち



の曲について



のように長い音は丸くし、又さらに附点を打つなどすればよい。

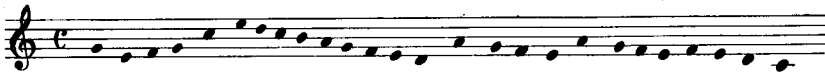
此の場合ピアノなりオルガンなりで指導する立場の人は、鍵盤から指を放す時、特に前述の長さについて注意して戴きたい。

次は一拍の中が数個の音符に等分されている場合。

例えば、



の曲を採る場合、①により、



と点のみで音の位置を印し、



のように一拍単位で横棒をつける。

此の場合、はっきり拍を意識しながら横棒をつけるには、ある移度の訓練が必要である。先



づ点だけで書かれた音符を一拍一拍まとめた形で読めるようになる事。その訓練方法として、旋律を記憶させて唱わせながら手を打つかして拍をまとめさせる方法、又足で拍を打たせながら足が打った時の音符の上に印をつけて行き、その印と印の間を横棒で結ぶ方法、例えば、




のように √ 印をつけさせて



のように印と印の間は一拍であるから横棒を引かせてまとめさせる方法等である。

さて、その横棒であるが、出来れば縦棒（符尾）を引いた時に音符として仕上るように点の上か下かを考えて引けるに越した事はないが、初めのうちはどちらでも引き易いところで良い。但し簡単に消せるように薄く書いておく事。又音の流れと同時にペンを動かして行くように心掛ける事。

尚、上例の二小節目の初めにある四ケの点（ミレドシ）につけられた横棒は一拍に四ケであるから  になるわけで、通常楽譜には  $\frac{4}{4}$  拍子、 $\frac{3}{4}$  拍子に



とか



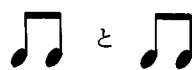
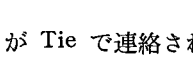

と書かれたものが多いが、書取の場合は必ず  のように一拍単位に分けて書く

事。そうしないと  と  を混同する恐れがあるからその習慣をつけておく事が必要である。

終りの方の三ケの点の上につけられた横棒は三連音符となるわけで、仕上の時「3」と記入しなければならない。

次に二拍でもって一つの音群をなしているものについての場合。

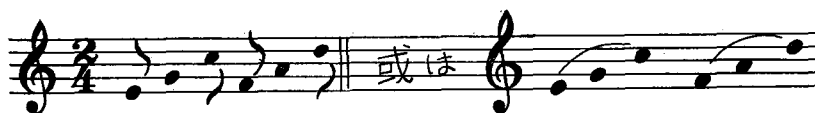
①  のリズムがある。

これは  と  が Tie で連絡された場合に起る。即ち  の事で

ある。此の場合の記入法は、例えば、



は



としておいて後に仕上げをすればよい。此の場合後者の方は  $\frown$  を消さなければならないが一つのまとまった形として認識するために良い方法だと思う。前者の記入法だと次に述べる附点音符の場合と混同することがある。

このリズムが数拍に渡って出て来た場合は例えば、



は



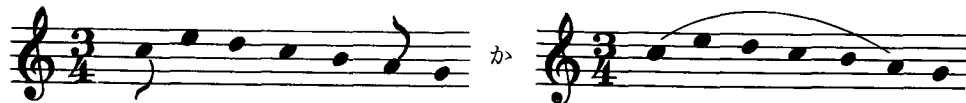
或いは



と書いておいて仕上げすればよく、又



は



としておいて拍を考えながら注意深く仕上げればよい。即ち短い音から短い音までを見つければよい事になる。

② のリズムがある。

これは と がTie で連結された場合であるが、この記入方法は、例えば、



は




のように八分音符に相当する音にのみ鉤をつける。ソの音の附点をつけてはならない。附点については後でも述べるが、此の場合附点を書くとその音が音符と間違ふ事が多い。又ソの音が二拍目の頭まで、四拍目の頭まで延びている事は当然考えられるし又記憶出来るからである。

註 上例の  の場合①の記入法から考えて



と仕上げ出来るわけだが、実際の経験では今までに混同し

た人に遭遇していない。然しその危険を避けるためにも  の方法を用いた方が良い。

①と②に共通して云える事は、「二拍目の頭に新しく音が奏されない」と云う事である。このような事は、tie を用いて作られるリズム、例えば



等多くのものが挙げられるが、拍の頭をはっきりと掴む必要がある。このためには歌唱練習に於て tie によって延ばされた次の拍の頭を母音で唱いなおす練習をする。

例えば、



のオ、オ、エ、アの場所の accent である。

この母音を入れる唱い方は Tempo の正確さの練習にもなる。


☒ Tie によって音群の作られる場合。

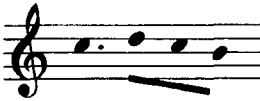

上述に出て来た  等の記入方法であるが、此の場合は延ば


された拍の頭に再び其の音を書きつけておく事である。余裕があればその同音の二音に tie をつけておいてもよい。此の際よく附点をつける人があるが、大変な間違いを起すものになるか

ら充分に注意すべきである。例えば



を先づ点だけで  と採り，次にドの音が一拍以上延びているからと云

うので  のように附点をうち横棒をつけると  と云うような譜になって了う。こうなると拍は大変な事になって小節線の位置も狂って了う事

になる。又  のリズムの時にもミの音が次の拍まで延びているの

で，つい附点をつけて  と書き誤る場合も多い。

そこで音群が頭に浮んで来ない時は必ず附点ではなくその延ばされた音を再び記入し其の音をピアノと共に再び唱いなおしながら聞けば，




であり



であることが理解される。

附点は音が延びたからつけられるのではなくて ♩ と ♪ が ♩ になり，♩ と ♩ が ♩ になると云う事，即ち附点は八分音符なり四分音符なりのはっきりした長さが解ってからつけられるものであると云う事を認識すべきである。極端な云い方をすれば附点音符は譜面の繁雑さを避けるため，簡略化するために生れた音符である。

一拍が等分割されていない音符の場合。






例えば  等の場合であるが，これはその拍内がどのようなものであっても，一拍として横棒でまとめておき仕上の時に記憶の旋律を唱いながら書き上げて行けばよい。

例えば，



の場合は、





と書いておけばよい。一拍として数個の音がまとまっておれば案外その内容は憶えているものでありわざわざ  だとか  だとか書く事は時間もかかり却って能率を悪くする。又リズムは唱えても書き方が解らない場合はその一拍を更に二つの小拍に分けて考えればよい。例えば  のリズムの場合、これを二つに分けると  のように唱う事になる。この音符は四分音符を一拍とした二拍によるリズムであるから、それを八分音符を一拍としたものとして書きなおせば夫々を半分にした  となるわけで横棒に





よってまとめると  となる事はすぐ理解される。

一拍に満たない長さの音符の場合。

この場合は大別して二通りの場合が考えられる。

- ① 拍の頭に音のある時。
  - ② 拍の頭は休んで中途から音が出る時。
- ①の場合はその音の長さを決める事が難かしい。

元来音と云うものはその出始めはよく解かってても、音の終り、消える時が解りにくい。次に続いて音があれば其の音の出るまでが前の音の長さである事は明瞭だが、休符が来たり、breath があったり、phrase の切れ目で終りの音がある程度長い価値の場合、その音は *diminuendo* されるのが常である。又短い音の場合、例えば  や  の場合は感じでもって処理される事が多い。

さて本論に返って一拍に満たない  や  などの音符の記入方法であるが、先ず *staccato* の印をつけておく事、そして曲の流れからそれを判断して  にするなり  にして一拍を埋めるための休符を補えばよい。此の際 *staccato* の印を消す事を忘れてはならない。又 *staccato* そのものを用いて記譜しても良い。此処で注意しなければならない事は、仕上げをするまで絶対に休符を記入してはならない事だ。これを念のためになどと考えて休符を書くと次に述べる②の場合と混同してうからである。

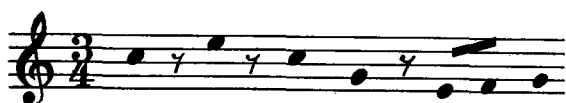


の場合



のように記入するのであるが、staccato の点はなる可く五線の外へ書いた方がよい。又 ♪ に仕上げる際には必ず ♪ を同時に書き添える事を忘れてはならない。

②の場合は、拍のどれだけ休んでいるかを考えて休符を記入しなければならないが、拍の頭は時間的位置を自ら打ちなどして知っており、音の出る頭の時間的位置も明瞭であるから当然休符の長さを知る事は出来る。



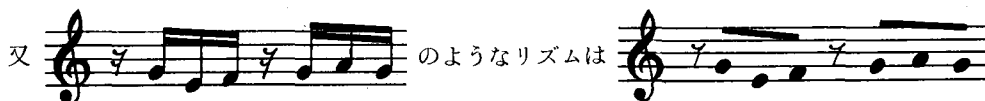
と記入したとすれば、ドは四分音符で次の拍の頭に ♪ があるから次のミは八分音符、次のドも八分音符となる。ソは四分音符となり次の ♪ の後に出てきたミファに横棒のあるのは

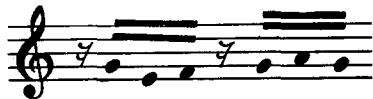


とならなければならない。何故なら、ミを八分音符として考えると次のファが拍の頭に来て拍の上拍から次の頭へ横棒を引く事はあり得ないからである（常に一拍個々を単位として考える事を忘れてはならない）。これを仕上げれば




となる。




として記入しておけば良い。此の際  と記入する事は前に

も述べたが、非能率的である。十六分休符の場所を八分休符で書く事は誤解を一見誤解を招くように思えるが、速く memo するための方法として敢えて此の方法を採る事にした。然し歌

唱の際十六分休符で breath したり多く休みすぎて  と唱

う人が多く略記入法と同形になって了う場合があるので、充分に注意されたい。

以上述べた事に関連して注意すべき事は、拍の頭の八分音符は  のリズム以外

は絶対に独立させて ♪ と書いてはならない事。この事から ♪ ♪, のようなリズムは必ず ♪ ♪ ♪ のように書く習慣をつけておく事。そうでないと ♪ ♪ ♪ のような音符を書く時頭の音符を ♪ と書いて了ったら後が書けなくなるからである。

複拍子（附点四分音符を一拍とする）について。

先づこの拍子の一拍は ♪, である事から一拍を小拍に分けて例を上げると

♪♪♪, ♪♪♪, ♪♪♪, ♪♪♪, ♪♪♪ 等数多く上げる事が出来るが、単拍子と共通の方法とそうでないものがあるから混同しないように注意されたい。

例えば、



の場合ド、レ、ソの附点四分音符は一拍を示すから、単拍子の場合の四分音符と同じ書き方とする。ミドはこの二音で一拍となるからこれをまとめて 〱 をつける。

以上の事からこの譜の略記法は



となる。この際ミドのリズムは ♪ ♪ ♪ か ♪ ♪ ♪ が両方に考えられるが、前者は三拍子の持つ最も自然なリズムのあり方であり後者は不自然なリズムのため記憶が明瞭に区別されるので其のままとした。又附点音符は前にも述べたように音符と間違える恐れがあるから使用しない方がよい。

又一拍内で ♪♪♪, ♪♪♪, ♪♪♪, ♪♪♪ 等のリズムの場合は、これも又横棒でまとめておいて単拍子の時と同じ考え方で仕上げればよい。

以上の事柄を知っておれば複拍子の略記法はすぐ理解出来ると思うので二、三の例を上げるのみとする。



の場合は



と記入するのであるが、三小節目の



は初めての方法であるから注意

されたい。

又休符は四分休符の場合と附点四分休符の場合、即ち一拍の休みの場合と同一の「」のみで一貫させる事になっている。

例えば、



の場合は



となって、三小節目の一拍目と二拍目が同じ休符で書かれている事に注意されたい。又八分音符の鉤は拍の裏にあるもののみにつける事を覚えておいてほしい。

以上で Solfège の聴音書取の項を終えるわけであるが、要は出来るだけ速く記符する方法として考えられる記符法を説明したわけで、此の書き方は飽くまでも自分個人だけの記符であり他人に演奏させるための楽譜ではない。其の場合は、此の方法によって採符した譜を正しい記符法に従って精書す可きである。

尚書取に際して注意す可き事柄として、

1. 旋律を速く記憶するよう勉める事。
2. 正確に拍を掴む事。
3. 一拍単位にまとめる事。
4. 音符、休符の長さを正確に捕る事。

それに加うるに

1. 音の聞えている時には消しゴムを使わない事。
2. 音の聞えている所のみを速く書き込んで、解らない所は後でゆっくり考える事。



3. 点の記入は音の流れがそのまま映っているようにゆるやかな時は音符の間隔をあげ、早い動きの時は音符間を狭く書く事。  
そして常に音符に接している事。  
以上の事を述べて此の項を終りとする。

(本学助教授一音楽理論)